

動詞 *werden* の二重用法について

— ケストナーの書簡集を資料として —

Double Usage of the German Verb *werden*
— Based on the Examples in the Erich Kästner's Letters —

板山眞由美*
Mayumi Itayama

助動詞として用いられる *werden* は、動詞の不定詞と結びついて未然の事柄や話者の推量を表す。また *werden* は本動詞として「～となる」という状態や人、事柄の変化を表す。この二つの *werden* が、ひとつの文の中で重ねて用いられる場合について、資料をもとにその理由や条件を整理して、今後の *werden* 研究への手がかりとしたい。

キーワード：本動詞 *werden*、動詞の不定詞と結びつく *werden*、二重用法、単独用法、語法詞

I. はじめに

筆者は、助動詞として *werden* が動詞の不定詞と結びついてつくる構文の意味用法を研究する過程で¹⁾、同様に *werden* が助動詞として用いられ、動詞の過去分詞と共につくる受動文に注目するようになった。このいわゆる動作受動 *werden*-Passiv (以下では受動文とする) には、*werden* が動詞の不定詞と結びついてつくる構文 (以下では *werden*+Infinitiv 構文とする) と、一つの文の中で同時に用いられる場合がきわめて少ないという傾向がある²⁾。この点に注目して、筆者は本論集—人間・社会・自然編 第 27 巻第 1 号 (2014 年 7 月) に「助動詞 *werden* の二重用法について」(資料) を投稿した。本稿では、助動詞としてではなく本動詞として用いられる *werden* が、*werden*+Infinitiv 構文の中で用いられる場合、いわばもう一つの「二重用法」に焦点を当てる。

本動詞 *werden* は基本的に「～になる」あるいは、「(事柄が) 起こる」という意味を持つ。しかしその意味内容は、この *werden* と結びつく述部の性質や、その形式によって異なる様相を示す。例えば次の例文 i) において、コーヒーは発話時に冷めつつあるとも考えられる。話し手が相手に「コーヒーが冷めますよ(早く飲んだ方がよいですよ)」と注意を促している場面が想像される。それに対して ii) は、主語の表す人物が、弁護士になるという予告、あるいは将来の計画について述べているもので、その人物は未だ弁護士になってはいない。

*流通科学大学商学部、〒651-2188 神戸市西区学園西町 3-1

- i) Der Kaffee *wird* kalt. コーヒーが冷める。
- ii) Er *wird* Rechtsanwalt. 彼は弁護士になる。

一般的に *werden* は起動的 inchoativ であると記述されるが、事柄の変化や生成が、果たして現時点で起こりつつあるのか、まだ起こっていないのかという点、事柄の実現性については必ずしも同義であるとは言えない。共通しているのは、その変化や生成の過程が未だ完了していないということであり、未然的 *prospektiv*、あるいは後時的 *nachzeitig* と呼ぶことができる。

本稿の目的は、このような本動詞 *werden* と、*werden*+Infinitiv 構文をつくる助動詞 *werden* とが重ねて用いられる場合の諸条件を、文中の他の文成分や語順などに注目しながら、特に今回は本動詞 *werden* が単独で用いられる場合と比較することによって、*werden* の二重用法を導く動機やその条件について、資料を整理・分析することである。

本稿で資料とする文例は Erich Kästner が母親に宛てて書いた手紙を集めて編集された "*Mein liebes gutes Muttchen, Du!*" (Albrecht Knaus Verlag, Hamburg) より得た。この書簡集は 1923 年から 1957 年まで Kästner が母親に宛てて書き送った手紙を、晩年彼と生活を共にした女友達 Luiselotte Enderle が本人から譲り受け 1981 年「時期が来たと思う」として出版したものである。

文体は基本的に書きことばではあるが、その表現の多くから Kästner が母親に直接話しかけているかのような印象を受ける³⁾。しかしながら、あくまでも二人の間に交わされた往復書簡ではなく、息子から母親への一方向的な通信文を編集したものであることを念頭に置く必要がある。

II. 二重用法に見られる特徴

1. 本動詞 *werden* の意味

本動詞 *werden* を用いた文が表す変化の様相は、この語と共に文を構成する述語・述部によって、必ずしも一様ではない。文中の他の文成分から、形容詞と共起する場合、名詞と共起する場合、それ以外の 3 タイプに分類することができる。

a. 形容詞と共起する場合

文例に続くカッコ内の数字は書簡集のページを示す。文例中の斜体、カッコ内は筆者による。一部、動詞人称変化形の語尾の省略や、ケストナー独自の言い回しと思われる名詞が見られるが、原書に忠実にそのまま引用した。

- 1) Ich bin, abgesehen vom Nachtdienst, sehr faul *geworden*. (23)

私は、夜勤は別にして、とても無精になってしまった。

- 2) Jedenfalls, der kleine Erich *wird* immer berühmter. (89)

いずれにしても、小さなエーリヒはますます有名になる。

- 3) Inzwischen *werden* die Maler fertig. (81)

その間に塗装工たちは仕事を終える。

- 4) Das *wird* sehr schön *werden*, mein Muttchen! (38)

それ（クリスマス休暇）はきっとすごく楽しいものになると思うよ、ママ！

上で4)は本動詞 *werden* が *werden*+Infinitiv 構文の中で用いられている二重用法の文例である。

b. 名詞と共起する場合

- 5) Es *wird* ein Reklameprospekt mit dem Text von mir. (28)

それは私の文章を載せた広告用パンフレットになる。

- 6) Im ganzen *werden*'s etwa 8 Bilder. (27)

全部で絵は8枚ほどになる。

c. それ以外、慣用的表現

i. 生成を表す

- 7) Was nun *wird*, weiß ich nicht. (21)

これからどうなるか、分からない。

- 8) Was aus dem Schulstreit *wird*, weiß ich noch nicht. (52)

学校をめぐる対立がどうなるか、まだ分からない。

ii. 「事がうまくいく」、「首尾よく運ぶ」

- 9) Es *wird* oder *wird* nicht – man muß es hinnehmen. (44)

うまくいってもいかなくても、それを受け入れるしかない。

2. 比較対象の限定

本動詞 *werden* が単独で用いられている文例と、*werden*+Infinitiv 構文をつくる助動詞 *werden* とが同時に用いられる二重用法の文例を比較するにあたって、その対象となるのは直説法現在形のみである。なぜなら *werden*+Infinitiv 構文は、基本的に現在形の形しか持たないからである。従って他の時制形式、過去形、現在完了形の文例（例えば文例 1）は対象から外れる⁴⁾。また本稿では接続法 I・II 式（12 例）も除外する。ちなみに、いわゆる六つの話法の助動詞と共に用いられた文例は 20 例（内訳は多い方から *sollen* 6 例、*können* 6 例、*müssen* 4 例、*wollen* 3 例、*mögen* 1 例）見られたが、本稿では対象としない。

従って本稿では、本動詞 *werden* が用いられた 217 例のうち、直説法現在形で本動詞 *werden* が用いられている単独用法 106 例と、*werden*+Infinitiv 構文をつくる助動詞 *werden* と本動詞 *werden* とが重ねて用いられている二重用法 46 例とを比較する。

3. 比較結果の整理と考察

以下に比較結果の概要を示す。次いで項目ごとに結果に現れた特徴を整理し、考察を加える。

表 1

	単独用法 106 例			二重用法 46 例		
文タイプ	形容詞 69 例	名詞 18 例	その他 19 例	形容詞 24 例	名詞 5 例	その他 17 例
話法詞との共起	27 例	sicher, vielleicht, ja, aber, auch, doch, mal など		22 例	schon, wohl, noch, aber, auch, ja, sicher など	
副文の中	35 例	従属接続詞と共に 間接疑問文の中で 関係文の中で		3 例	間接疑問文の中で 従属接続詞と共に	

a. 文タイプ

本動詞 *werden* の単独用例において、形容詞との共起は 69 例、名詞との共起は 18 例、その他・慣用的表現は 19 例見られた。二重用法においては、形容詞との共起 24 例、名詞との共起 5 例、その他・慣用的表現 17 例であった。三つの文タイプの比率を見ると、二重用法において、述部に形容詞、名詞、つまり具体的な様態やもの・ことをとらない「その他のタイプ」とした慣用的表現の比率が高かった。特にその中でも、主語を省略して *werden* の定形で始まる文例が 17 例中 9 例を占めた。「きつとうまくいく！」という書き手の強い期待・願望を表す表現として好んで用いられているようだ。これ自体が慣用的表現として認識されているのかもしれない。

10) *Wird aber schon noch werden.* (118)

きつと何とかなるだろうよ。

一方単独用法では、*was* で始まる間接疑問文の中で用いられている文例（例えば上で挙げた文例 7、8）が、慣用的表現の文例 19 例中、11 例を占めた。単独用法では、このように副文の中で本動詞 *werden* が用いられる場合が多く見られる。この点については後の項 c で触れる。

7) *Was nun wird, weiß ich nicht.* (21)

これからどうなるか、分からない。

b. 話法詞との共起⁵⁾

二重用法と、単独用法の文例との比較で際立った差異は、いわゆる *wohl* や *schon* など、話者の主観的感情や態度を表したり、事柄の実現可能性を判断する副詞、いわゆる話法詞 *Partikeln* の使用頻度が、二重用法 46 例中そのおよそ半数の 22 例に及び、単独用法では 107 例中、約四分の一、

27 例であったことである。以下に文例を挙げる。(下線は筆者による)

i. 単独用法の場合

11) Die Aufführung wird sicher sehr nett. (171)

その上演はとても楽しいものになるにちがいない。

12) Vielleicht wird das was. (123)

それはうまくいくかもしれない。

ii. 二重用法の場合

13) Es wird noch alles gut werden, und der Doktor kommt dann auch mit dran. (15)

万事何とかうまくいくと思う。そしたら博士号も一緒についてくるさ。

14) Aber es wird schon alles werden! (26)

でも万事きつとうまくいくだろうよ!

二重用法では、話法詞が用いられている文例が多く見られただけではない。同じ文中に複数回現れる文例が少なくない。三つ重ねられた場合もあった。

10) Wird aber schon noch werden. (118)

きつと何とかなるだろうよ。

二重用法の文例で用いられた話法詞は、多い方から schon (8)、wohl (6)、noch (5)、aber (2)、auch (2)、ja (2)、sicher (2)、einfach (1)、doch (1) が、二つ重ねて用いられた組み合わせは auch noch、wohl auch、wohl noch、wohl doch、ja wohl があり、三つ重ねられた例は 11) に見られるように、aber schon noch であった。話者の主観的感情や態度を表す話法詞の多用は、話者の発話内容への関与の強さを示している。一方、単独用法で多く用いられた話法詞は多い方から sicher (6)、vielleicht (4)、ja (3)、aber (2)、auch (2)、doch (2)、mal (2)、noch (2)、nur (2) で、bloß、eben、freilich、wirklich、wohl は 1 例ずつ見られた。二つ重ねて用いられた組み合わせは aber sicher、doch wohl、vielleicht (...) noch、vielleicht (...) wirklich であった。最も多く用いられた上位 3 つが、二つの用法間で異なっていたことは特記すべきと思う。話者が事柄の生起を確実と判断している sicher が単独用法に多く、次に多かった vielleicht は、二重用法では全く見られなかった。一方二重用法で最も多かった schon が単独用法には全く現れず、二重用法に 6 例見られた wohl は、単独用法では 1 例のみであった。この共起傾向から推察すると、単独用法と二重用法では無論共通部分はあるものの、話者の主観的感情や態度を表す手段として持つ機能、はたらきが異なるのかもしれない。この点については下の項 d でも触れる。

c. 副文の中で用いられる場合

上の項 a と b で指摘した傾向とは反対に、二重用法は副文の中で用いられる場合がごく少なく、

46 例中、3 例 (daß をともなう副文 1 例と was に導かれる間接疑問文が 2 例) のみであった。それに対して副文中で本動詞 *werden* が用いられる単独用法の文例は 107 例中、35 例に上った。それらを副文の種類によって分類すると以下のようになる。

- i. 従属接続詞と共に 20 例：daß, damit, wenn, bis, ehe, bevor, weil (文例 15、16)
- ii. 間接疑問文の中で 14 例：was, wie, wann, ob (文例 7)
- iii. 関係文の中で 1 例：関係代名詞 *das* と共に (文例 17)

15) Wenn mir's zuviel Arbeit *wird*, rücke ich wieder ab. (15)

もし仕事が多くなりすぎたら、そのときは身を引く。

16) Sie wollen das Emilbuch sehr groß rausbringen, damit es ein Erfolg *wird*, hat der Verlag aus New York geschrieben. (106)

エーミール (と探偵たち) が成功を収めるように、大々的に発表するつもりだ、と出版社がニューヨークから手紙で知らせしてきた。

7) Was nun *wird*, weiß ich nicht. (21)

これからどうなるか、分からない。

17) Ich hab gestern abend gleich ein neues Gedicht für ihn begonnen, das, glaub ich, auch gut *wird*. (65)

私は昨夜すぐ、彼のために新しい詩を書き始めたが、それはきつといい詩になると思う。

上の 15) においては、*wenn* が導く副文の仮定的な内容が、*werden*+Infinitiv 構文を用いることによって加えられる話法的意味 (話し手の主観的な判断・推量を表す) と相容れないため、二重用法が避けられていると思われる。同様に、想定される条件を提示して *damit* 「～する目的で」、*bevor* 「～よりも前に」、*bis* 「～まで」などの従属接続詞が導く副文も、*werden*+Infinitiv 構文と共起しにくいようだ。

また副文内では定形が後置されるという語順規則があるため、二重用法で *werden* の定形が文末に置かれると *werden wird* のように *werden* が二度繰り返されることになる。副文の中で用いられることが少ないのは、このような「繰り返し」を避けるという文体的な配慮がはたらいっている可能性がある。

次に示す 18) では「～ではないかと恐れる・心配する」動詞 *fürchten* を、心配事の内容を主文で表した後に *fürchte ich* として置き、主文の形で両者をつなげている。(2 例) また 19) では、*ich denke* に続く文を、副文ではなく、間にコロンを付けて主文で表わしている。先の文例と同様、文体的な配慮がはたらいっているものと考えられる。

18) Das *wird* ein toller Winter *werden*, fürchte ich. (156)

この冬はひどく厳しい冬になるのではないかと心配だ。

19) Ich denke, er (der Kinderroman) *wird* nett *werden*. (145)

それは楽しい作品になるだろう、と思う。

d. 残された問題

上の項 a から c では、主として二つの用法の異なりに注目したが、以下では共に推量や期待を表す表現形式である、という共通部分について考察してみる。単独用法で用いられている話法詞の中で最も多かった *sicher* と、二番目に多かった *vielleicht* は事柄の実現性に対する話者の心的態度を表し、当該の文が話者の主観的な判断であることを示す(文例 11、12 も合わせて参照)。

20) Er (der Brief) *wird* aber *sicher* 10. (29)

その手紙は 10 ページにはなるにちがいない。

同様に *werden*+Infinitiv 構文も、不随意的動詞であり起動的 inchoativ な *werden* と共に用いられる場合、主語の人称に関わりなく推量、あるいは予想という意味用法を持つ⁶⁾。

4) Das *wird* sehr schön *werden*, mein Muttchen! (38)

それ(クリスマス休暇)はきっとすごく楽しいものになると思うよ、ママ!

但し単独用法の文で話法詞を用いない場合、話者は事柄が確実に起こることとして表している。

3) Inzwischen *werden* die Maler fertig. (81)

その間に塗装工たちは仕事を終える。

単独用法では話法詞という語彙的な手段で、主観的な判断や推量であることを表しているのに対して、二重用法では *werden*+Infinitiv 構文それ自体が事柄の実現や生起を、話者の主観的な判断として表している。さらに話法詞を重ねて用いることによって、事柄の実現を望む話者の強い心情が伝えられる。話者にとって肯定的な内容の場合は「期待」(文例 10、13、14)、否定的な内容の場合は「不安」や「心配」の表明となろう。

21) Vor Sonnabend *wird's* ja wohl nichts *werden*. (167)

土曜日以前は、恐らくどうにもならないだろうよ。

また今回は比較の対象から除外したが、接続法 I 式を用いた命令文や、接続法 II 式による非現実話法を用いて期待・願望を強調した文例があった。

22) Also, Liebes, *werde* mir bald wieder ganz gesund. (71)

だから大好きなママ、一日も早く元気になってね。

23) Wenn nur Dein Herzchen bald wieder besser *würde*. (195)

ママの心臓が早くもっとよくなったらどんなに嬉しいことか。

このように、話者の主観的な判断・推量、そして実現を強く期待し願う心情が、さまざまな表現形式によって表わされている。どの形式や語彙表現を選択するのか、その選択を左右する条件とは何かという観点から、二重用法のはたらきをさらに詳しく調べる必要がある。

また *werden*+Infinitiv 構文の中で用いられる場合、本動詞 *werden* の不定詞が文末に置かれること、そして助動詞 *werden* が文頭から二番目の定形位置を占めるため、文がより長くなるという複合的な構造ゆえの文体的な効果も、一定程度の役割を果たすと考えられるが、ここでは問題提起

として指摘するにとどめる。副文に現れた数少ない二重用法の文例を以下に示す。

24) Ich hoffe, daß es (mein Weihnachtsmärchen) einfach wundervoll *werden wird*. (53)

それ（私のクリスマス物語）はきっと素晴らしいものになるだろう、と期待しているんだ。

III. まとめ

1. 結果と考察

上に述べた比較結果と考察を以下にまとめる。

a. 文タイプ

二重用法で慣用的表現がより多く用いられている。但し単独用法、二重用法を合わせた 152 例の中、慣用的表現は 36 例で、名詞と共起した 23 例より多い。共起する相手から見た文タイプとしては形容詞に次いで多い。二つの用法を通じて慣用的表現の重要性が指摘できる。

b. 話法詞との共起

二重用法において頻度が高い（文例全体の半数弱）。また話者の推量、主観的な判断、心情・気持ちを伝える話法詞の中でも、主観的な感情や態度を表す話法詞が多く用いられていて、話者の発話内容への関与の強さがうかがえる。事柄の内容が肯定的であれば「期待」、否定的であれば「不安」や「心配」が表明されていると考える。

c. 副文の中で

単独用法に比べると、二重用法は副文の中で用いられることが極めて少なかった。文体的な配慮によるのではないかと考えられる。副文の中では動詞の定型が文末に置かれるという語順規則によって、二重用法の場合には *werden* が文末に連続して現れることになる。それを避けるために、主文の形が選択されるのではないか。

d. 残された問題

話者の主観的な判断・推量、そして実現を強く期待し願う話者の心情は、さまざまな表現形式によって表わされていた。どの形式や語彙的表現を選択するのか、その選択を左右する条件は何かという視点から、二重用法のはたらきについて調べる必要があると考える。また *werden*+Infinitiv 構文の複合的な構造（本動詞 *werden* の不定詞が文末に置かれ、助動詞 *werden* の定形が文頭から二番目を占め、文が長くなる）による、文体的な効果も考慮すべき点である。

2. 今後の課題

本稿で取りあげた *werden*+Infinitiv 構文の中で、本動詞 *werden* が重ねて用いられる二重用法においては、話法詞との共起が多く、話者の強い関与が指摘できる。また慣用的表現の文タイプに、二重用法が比較的多いことが明らかになった。一方で、副文中で用いられる二重用法が極めて少ない。文体的な配慮がはたらき、二重用法を避けていると解釈される。しかしながら、複合的な構造を持つ二重用法が、一見冗長ではあるが、敢えて用いられる場合があり、その理由については、さらに調査し検討したいと考えている。本稿では、これらの結果と考察について、2014年に資料として本論集に報告した「助動詞 *werden* の二重用法について」(受動文をつくる *werden* が *werden*+Infinitiv 構文の中で用いられる場合)の調査結果と比較・対照するには至らなかった。今回除外した文例を含めた二重用法の全体像を把握する作業と共に、今後の課題とする。

注

- 1) この構文をいわゆる未来形 Futur として、時制体系の一つとして捉える文法記述が多い一方で、この構文が持つ話法的な意味を根拠に、話法の助動詞として、もしくはそれと同列に置いて記述する立場がある。筆者は後者の立場をとる。Engel (1988)、Itayama (1995)、板山 (1997)、板山 (2008)を参照されたい。Vater, H.が *werden* als Modalverb (1975) でこの主張を提起して以来、論争が続いている。
- 2) Helbig/Buscha の文法書 *Deutsche Grammatik. Ein Handbuch für den Ausländerunterricht.* (1986:161) に、動作受動の未来時制は比較的まれである、との記述があるが理由は述べられていない。
- 3) 書簡集の緒言の冒頭には“Mein Junge verschweigt mir nichts.“「息子は私に包み隠さず何でも話してくれます」という母親のことが挙げられ、この息子と母親の間の固い絆と信頼関係が察せられる。
- 4) *werden*+Infinitiv 構文には、話法の助動詞と多くの点で共通点が認められる。しかし過去形や完了形の形を持たないという点で、話法の助動詞と一線を画す。
- 5) 本稿ではドイツ語 Partikeln にあたる術語として話法詞を使った。但し近年では、事柄の実現に関する話者の心的態度を表す副詞を話法詞とし、話者の主観的な心情を表す副詞を心態詞として区別する立場が優勢になってきている。しかし両者にまたがった機能を持つ副詞、例えば *wohl* や *vielleicht* などは明確に区別することが難しい。
- 6) *werden*+Infinitiv 構文の意味用法は、不定詞の形で *werden* と結びつく動詞の随意性 *Kontrollierbarkeit* (あるいは意志的 *voluntativ, volitiv* であるかどうか)と主語の人称、動詞の動作態様、話者と聞き手との間の社会的関係などから、その都度の解釈が複合的に導きだされると考える。板山 (1997)、板山 (2008)を参照されたい。

参考・引用文献

- Duden (1995): Die Grammatik. 5. Aufl. Mannheim/Leipzig/Wien/Zürich.
 Engel, U. (1988): Deutsche Grammatik. Heidelberg.
 Helbig, G/Buscha, J. (1986): Deutsche Grammatik. Ein Handbuch für den Ausländerunterricht. 9. Aufl. Leipzig.
 井口靖 (1995): 副詞 [浜崎長寿・乙政潤・野入逸彦編『ドイツ語文法シリーズ』第5巻 大学書林]

- Itayama, M.(1993): *Werden* — modaler als die Modalverben! In: *Deutsch als Fremdsprache*, 4/1993, S.233-237.
- 板山真由美 (1997): 現代ドイツ語における *werden*+不定詞について [日本独文学会編『ドイツ文学』第 99 号、48-59 頁]
- 板山真由美 (2008): *werden*+Infinitiv 構文の意味と用法—その多義性の構造— [三瓶裕文・成田節編『ドイツ語を考える』149-158 頁、三修社]
- 板山真由美 (2010): ドイツ語における *werden*-Passiv の時間指示—手紙を資料として— [流通科学大学学術出版会『流通科学大学論集—人文・自然編』第 23 巻/第 1 号、49-58 頁]
- 板山真由美 (2012): ドイツ語における *werden* の意味と文法—ケストナーの母親への手紙を資料として— (資料) [流通科学大学学術出版会『流通科学大学論集—人文・自然編』第 24 巻/第 2 号、39-43 頁]
- 板山真由美 (2014): 助動詞 *werden* の二重用法について (資料) [流通科学大学学術出版会『流通科学大学論集—人文・自然編』第 27 巻/第 1 号、43-47 頁]
- Vater, H. (1975): *Werden* als Modalverb. In: J.P. Calbert-H. Vater (Hg), *Aspekte der Modalität*. Tübingen, S.71-148.